



ゲルールのサロン：
ベルナノスの『欺瞞』についてのノート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天羽, 均 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010031

ゲルーのサロン

——ベルナノスの『欺瞞』についてのノート——

天 羽 均

1

1926年、『^{ナン}悪魔の陽の下で』*Sous le Soleil de Satan* で小説家としてデビューしたジョルジュ・ベルナノスは、自分の作品が、「戦争から生れた本のひとつだ」¹⁾と、発表直後のフレデリック・ルフェーヴルとのインタビューで語っている。同じインタビューで、「証言せずに死ぬのはごめんだ」²⁾とその動機を語っていることは、これまでもしばしばベルナノス研究家によって引かれてきた。

学生時代から、アクション・フランセーズの青年行動隊である Camelot du Roi の活動家であり、1913年には、王党派週刊紙 L'Avant-Garde de Normandie の編集をまかされ、論陣をはっていたベルナノスにとって、小説家になるという選択は、他の文学者とは違った意味を持っていた。

文学作品がひとつの時代の証言であること自体は、作者の制作意図とは別に、どの文学作品をとっても言いうることであり、多くの文学研究が、それぞれの作家について、これを論じてきた。19世紀のブルジョワジーの勃興と小説の隆盛が軌を一にしていることは、つねに指摘されてきたところである。そうした小説社会学的な意味とは別に、小説家がより直接的に同時代の「歴史的事件」をテーマに作品をつくることも、とくに第1次世界大戦以後、少なからず見られる。

ところで、ベルナノスが小説 roman を書いたのは『^{ナン}悪魔の陽の下に』の

執筆にとりかかった1923年から『ウィーヌ氏』 *Monsieur Ouine* の執筆を終えた1940年までの期間であり、これと平行して、闘いの書 *Ecrits de Combat* と呼ばれる polemical な文書の執筆も精力的に行っており、‘奇妙な戦争’以後は、『カルメル会修道女の対話』 *Dialogues des Carmélites* をのぞけば、すべての文筆活動はこれに捧げられる。

ではベルナノスが、polemistとしての活動とは別に、「証言するため」に小説というジャンルを選択したのは何故か。この問いは、ベルナノス研究の重要なテーマであるだけでなく、小説、とくに20世紀の小説の研究にとっても興味深いテーマであろう。ベルナノスは彼の作品のなかに、しばしば文筆家、作家を登場させる。『悪魔の陽の下に』のサン・マランや『欺瞞』 *L'Imposture* のセナブルを中心にした多くの文筆家、『ウィーヌ氏』の同名の主人公などは、それぞれ、アナトール・フランス、ブルモン師、ジッドといったはっきりとモデルとして名前が話題になる作家がいるし、ほかにルナンなども含め、当時の若い世代に少なからぬ影響を与えた人物を読者に思い起こさせる³⁾。

『ダルジャン夫人』 *Madame Dargent* のダルジャン、『悪夢』 *Un Mauvais rêve* のガンスのように、作家：モデル＝読者の関係をテーマとし、不毛な作家に対して作中人物を生きるモデル＝読者という作品創造の過程そのものをとりあげた作品など⁴⁾、言葉による創造の問題がベルナノスにとってきわめて重要なものであったことを示している。

いずれの場合にも共通なのは、ベルナノスが小説の中でたびたび述べている、言葉の不確かさ、無力さといった、20世紀において書くことについての彼自身の絶えざる問いかけを含んでいることである。小説家ベルナノスがpolemistとどう関わったかを考えるうえで重要なポイントとなる。

このような問題を考えるとき、はじめに見た時代の証人たることについて、別の箇所で彼自身が述べている言葉が思い起こされる。「自分の本が、あなた方から出るスキャンダルの続く間だけでもつようと願っている。それより瞬時たりとも長くはいらぬのだ。」⁵⁾ 彼の証言の根底にあるのは、彼自

身経験した第1次世界大戦にささげられた兵士たちの青春であり、それが戦後体制のなかで一顧だにされずにふみにじられていくさまであり、『悪魔の陽の下に』から『よろこび』*La Joie* にいたる20年代の小説、そのすぐ後に発表されたポレミックな作品『良識派の大恐慌』*La Grande Peur des bien-pensants* のうちにあるものである。しかしながらその証言の有効性は、スペイン市民戦争、第2次世界大戦のなかで、不幸にも再び見出される。前線で戦う者の、闘いの意味すら奪われた悲惨を、後方で空しい弁舌に明け暮れ、時代の悲惨さをはかり得ない老人の世界において証言する必要性は強まるばかりであった。

小説において、後方＝大人の世界によって無視されるだけでなく、行為の可能性そのものを奪われてしまう「辱められた子供たち」のテーマがこうして中心になる。この幼少年期に超自然的意味を与えるのが、ベルナノスの司祭たちである。『田舎司祭の日記』*Journal d'un curé de campagne* でトルシーの主任司祭は「キリスト者の民の反対は悲しい民、老人の民だ」（プレイアッド版『ベルナノス小説作品集』p.1044）と語り、さらに「教会は神様から世界にこの子供の精神、この率直さ、このみずみずしさを保つように託されたのだ」（*ibid.* p.1046）と述べる。

いっぽうその教会の中にも前線－後方の対立が、教会の最前線にいる教区の司祭と教会組織の間に認められる。ここではベルナノスの攻撃の鋒先は、第3共和政下にあってブルジョワジーと妥協をはかり、進歩と民主主義に色目を使うカトリック教会の一部、いわゆるカトリック・モデルニストに向けられる。彼の20年代の小説作品の中でも、きわめてポレミックな調子でこの問題をとりあげている『欺瞞』の第2部は、特異な様相を帯びている。『欺瞞』は引き続いて発表された『よろこび』と本来ひとつの作品として構想された4部からなる作品であるが、この第2部については、全体の構成を損う部分とする見方がかなり強い⁶⁾。

ベルナノスの小説では主人公のドラマが、対話を通して進行する。『欺瞞』においても、セナブルがペルニション、シュヴェンス、町の浮浪者との対話

のうちに自己の内奥を開示されて行く過程については既に見た通りである⁷⁾。『^{サタン}悪魔の陽の下に』のドニサン-悪魔、ドニサン-ムーシェットの出会いは、ドニサン、ムーシェットの2人の主人公に超自然的光を与える。『田舎司祭の日記』の田舎司祭とシャンタル、さらに伯爵夫人の対話は、そのもっとも顕著な例であろう。

これに対し『欺瞞』の第2部は、ゲルー氏のサロンを舞台に、大勢の人物が登場する劇として書かれている。登場人物も、ペルニションを除き、この舞台にしか登場しない人物がほとんどで、あたかも古典劇におけるファルス、あるいはバレエの場面を想起させる。この劇中劇にも似た舞台で展開される劇の意味は何か、登場人物と、ドラマの展開を見てみたい。

2

第1部でシュヴァンス師との対話のあとの長い自己との対話ののち、開示された虚無とむきあったセナブルの行動は、フランクフルトで行われる国際心理学会に依頼された講演「ルター教会における神秘神学」をするために、直ちにパリを離れることであった。生活の殻を抜け出すことで一時的回避を考えた。

「こんなに不意に消えてなくなるという考え、仕事上のつとめをきちんと果すことで知られ、人と会う約束もたがえたことなく、筆まめなことで知られている人物がまさか、そう考えただけで彼の心は少し軽くなった。これはほんの試しじゃないか。ほんとうに逃げ出すためのささやかな試みなのだ．．．」(プレリアッド版、『ベルナノス小説作品集』p. 378, 以下ページ数のみを記す。)

こうしたセナブルの目論見どおり、セナブルの急なドイツへの出発、帰国後の沈黙について、社交界は当惑する。その混乱の中心が、セナブルの寵を失ったと見られるジャーナリスト、ペルニションをめぐる人々の反応である。ペルニションの生きる宗教と政治のからみあった世界は、すなわちセナ

ブルの名声を支えていた世界でもある。したがって、第2部で描かれるゲルーのサロンは、いわばセナブルの脱ぎすてた衣装を象徴する世界である。

第2部の半ば以上を占めるサロンの情景では、登場人物のそれぞれ引きずっているあいまいさが二重に露呈されていく。ひとつは、セナブルが自己の世界の崩壊に直面し、著名な作家としての生活をすてようとしているのと対照的に、彼のいないサロンで、彼の著作が論じあわれ、弁じあわれ、その虚像に振り回されている光景の滑稽さで、それぞれの人物たちが真剣に自分の立場を弁護しようとすればするほど、その不毛さが浮び上がってくる。

いまひとつは、セナブルの保護を失ったペルニションへの非難に対する、ペルニション自身の反撃によって暴露されていく宗教界と政界の一部、それと結びついたジャーナリズムを支配する日和見主義的あいまいさである。

ゲルーのサロン、すなわちセナブルの生活の舞台となっていた世界がどのようなものか、主な登場人物を中心に見てみよう。

a. エスプレット司教

バルナノスの作品に登場する聖職者としては、小説の主人公になる司祭たち、ドニサン、シュヴェンス、田舎司祭など、教区で、第一線にあって闘う人物がいる。現実生活への不適應と、肉体的苦痛。その中にはドニサンのように自らに苦行を課してまで肉体を痛めつける禁欲的な快樂の拒否。それは教会などに目もくれず、牛馬の世話とアルコールに日を過す農民たちや、太古からの罪の変らぬ相貌を告解室に運んでくる女たちの間を歩きまわる、泥にまみれたスタータンに似合った生き方である。

こうした若い、無器用で、へまな司祭の傍には、ムヌウスグレ師やトルシーの主任司祭のような先達がいる。教会の組織の中で、物分りがよくなかったために敬遠された司祭たちで、もはや土にまみれるエネルギーはもたぬが、そしてときにわずかばかりの快適さを自分にゆるすが、若い者が苦行するのを黙っては見過ごせない、経験豊かな相談相手である。

こうした司祭たちと対照的な人物に、セナブル師がいる。ウィーヌ氏もや

がて仲間入りするだろう。虚無に身を委ねたこれらの人物の検討はここでは取り上げない。

このいずれでもない、いわば非ベルナノスの人物がエスプレット司教である。高位聖職者は、おそらくそれだけで、非ベルナノスの烙印をおされる。第3共和政下のカトリック教会というものを、おそらく彼は認めない。あるのは永遠の教会だ、と言うだろう。

「進歩」を信奉し、「時代の申し子」であることを誇りにするエスプレット司教について、「そのたびごとに自分に記されている永遠のしるしを否定していたことにまったく気づかなかった」(p. 388)と断罪している。

政界、宗教界、ジャーナリズムの世界を泳ぎまわり、議会選挙や教会人事、アカデミーの候補者選に首をつっこむために野合している連中の集まるサロンで、「父親のようなほほえみ」をトレードマークに、ペルニションへの非難、これに対するペルニションの反撃が激するたびに「わからない」を繰り返し(p. 397, 401)、「私は障害は避けて通る」(p. 388)と公言してはばからない。

エコール・ノルマル出身のアグレジュを誇りにする、というフランスの典型的エリート社会が教会と重ね合わされている。神学校での学業に苦しんだベルナノスの司祭たちとの対比は言うまでもないが、ここではセナブル、ゲルーといった文化人との対比が意識されている。セナブル、ゲルーが現代のニヒリズムにおかされているのに対し、エスプレットは、あくまでおめでたい人物として描かれている。ベルナノス研究家 Max Milner はこの Espelette という固有名詞のうちに見られるおめでたさを指摘している⁸⁾。小説から引用すれば例えば次のような一節。

「愛されるためにだけ生きているこの男ほど愛に値しない者はなかりう。各人の好みにたくみに自分をあわせるこうした人物は、弱者が自分の弱さを憎むことをすぐに憶え、強者が自分の力を疑うことを憶える鏡にすぎず、すべての者に軽蔑されるような人間のひとり。」(p. 388)

こうしたポルトレはモラリストの世界であり、小説人物という点からみれば

ばまことにつまらない。このような小説家自身の描写でこの人物を語ろうとすれば、引用する箇所は多過ぎて選択に困るほどである。つまりもともと小説上の人物ではなく、モラリストの描くポルトレであり、ゲルーのサロンでのマリオネットである。しかしこれをベルナノスの人物創造の欠陥と言ってしまえるかどうか。

もともと非ベルナノス的人物として登場するとすれば、そこにはドラマの可能性はないはずである。しかも、その他大勢で舞台の流れを助ける立っていればいだけの人物でもない。ペルニションを自殺に導く、あるいはペルニションの自殺を防ぎ得ない世界にきわめて重要な役割を果していることに間違いはないのである。

すなわち現代都市生活情景（ゲルーのサロン）にはなくてはならない要素のひとつなのだ。凡庸な者の醜悪さ、それは悪魔の誘惑からも見放されたものと定義されている。しかもそれが現代世界を満たしているとすれば、また醜悪な世界を表わす醜悪な装置のように舞台におかれ、臭気を発するのがその役割であるとするなら、エスプレット司教のさまざまなポルトレはその装置と言えるのではないか。たとえば次のようなせりふがそうである。

「われわれが作ろう、結集させようと思ったのは、真面目で、慎重で、冷静で、できるかぎり階級的、教条的偏見を抱いていない、近代思想に好意的で、熱心に民主主義を支持するほどの人．．．つまり．．．われわれに役立つ．．．というか．．．要するに権力との間にそれとなく仲介者となってくれるような人たちなのです。とにかく幻想を抱いてはいけません。現実を見つめなければ、国家が今日ほど強いことはないのだから．．．」
(p. 422)「教会と近代社会は一致する．．．和解したのだ．．．」(*ibid.*)

これは第3共和政下の教会の動きを表わすものでもあり、ポレミスト・ベルナノスが、日和見主義として攻撃して止まぬ見方に他ならない。

ce sot, ce niais, ce naïf compliqué とこの人物に与えられた表現は、読者に他に解釈の余地を与えぬ断定であり、読者は戯画化された人物の背後に、現代のカトリック教会へのベルナノスの苛立ちを見る。

b. カタニ氏とサロンの人々

ゲルーのサロンの登場人物のなかで、もっともあいまいな、しかしもっとも重要な *antagoniste* の役割を果たすのがカタニ氏である。ゲルー、エスプレット司教と同世代の、ジャーナリズムの黒幕である。黒幕というのはジャーナリストになりそこなった仕掛人、とでもいうような意味である。この人物の舞台への登場は幕が開いてしばらくしてからであるが、エスプレット司教の場合と同様、作者による短いポルトレがこの人物を描写する。

「誰ひとりとして、おそらく1行もこの人物からは引用できない、というのは半世紀以上も前から、誰にもわからない変名で、それも泥棒が寝ぐらを次々に変えて警察の手を逃れるように、姿を見せるだけの、いかがわしい短命な新聞にしか書かないからで、この冷酷な老人は、それでも彼より憶病で、単純な古強者の間では、大物の宗教情報通で通っていて、彼が判決を下せば、誰も覆せない。」(p. 392)

小説に登場する人物をなぞって説明しようとすれば、どうしてもポルトレ的な描写のみを追うことになる。しかし、第2部のサロンの情景はむしろ、会話の多い、それも大勢の登場人物が巧みに配置された舞台劇に近い面白さを持っている。

ペルニションとカタニ氏のやりとりがその中心となっている。ペルニションが、もはやセナブルという後立てを失くした、という第1部の結末からつづく事件は、こうしたボス同士の勢力が活動を支配する世界に大きな波紋をなげかける。カタニ氏にとっては、さらに他のペルニションを利用していた連中にとっては、もうこの哀れなジャーナリストは糸の切れた罫で、ご用済み、というわけである。

これまでは大胆な発想と見られてきたものも、若気のいたり、やり過ぎだ、と攻撃され、もともと全面的なバックアップをうけて刊行を目前にした調査まで時期尚早ということで、ペルニションは失脚を余儀なくされる。セナブルは、このような世界を泳ぎまわるペルニションの凡庸さのうちに自己の戯画を認め、その世界に別れを告げようとしたのだった。しかしペルニション

にとっては唯一の生活の場であり、しかも自分を利用して来た人間からの絶縁状を黙って受け取るわけにはいかない。カタニ氏のいかがわしい過去のスキャンダルを言いたてて、その不実をなじる。

この壮烈なやりとりを、弥次馬のように取りまくサロンの連中は、強者と弱者を鋭敏に感じとって自らの立場を決めていくが、2人のやり取りを見守るサロンが、そのときどきの反応を観客＝読者に見られる、というのが舞台劇の仕組みになっている。ペルニションの自暴自棄の告発が、カタニ氏の内幕だけでなく、サロンそのものの内幕も暴露するという二重構造である。

こうして露わにされるサロンの原理の一つは *curiosité* 好奇心である。彼らの好奇心はペルニションの口をふさぐために非難の声をあげるのも忘れ、カタニ氏の対応を見守る。 *la curiosité la plus brûlante* (p.405), *cette curiosité pleine d'angoisse* (p.403) この好奇心が、愛と対極にある、冷い火であることは、すでにセナブル師の行動原理の分析で見た通りである⁹⁾。

そしてこの好奇心の裏にあるのが、ペルニションーカタニの争いを、あくまで対岸の火事としておこうという無関心である¹⁰⁾。自己保身のための無関心は、好奇心の欠如によるものではなく、好奇心と表裏一体となった現代の病理である。

こうしたサロンについてのポルトレを一つだけ引用しておこう。

「彼らの人工的な小社会は、密室の中で生き、栄えている。そして、そこで育まれた彼らの情熱は、どれほど激しいと予想されようと、型にはまった兆候しか見せず、厳しい抑制、すばやく性格と徴候を変えてゆく形式的規律に従っているのだ。結局のところ、必要な隠蔽によってゆがめられ、深く根をおろしたこの同じ悪徳ほど、開かれた、執拗な悪徳と似ても似つかぬものはない。こうしたことは、いたるところで観察できるが、宗教界と政界から等しい距離に生きるこの奇妙な連中のなかでほど有効に観察できるところはまたとない。彼らは忍耐強く、熱心に、双方に口をはさむ。つねに秘密の策略から生じる性格から、影に隠れ、絶えず否認される調停者、状況と局面に縛られている奴隷、恥ずべきデマゴーク、疑わしい

正統派、何ひとつ固有のものを持たず、勝者の側からそのまま借りた教義にも、報告書や教書の文書の文体を奇妙になぞり、ある種の文学が世に広めた滑稽な言いまわしの言葉遣いにすら、固有のものはない。」(p. 405-6) こうしたあいまいさと、カタニ氏のあいまいさは、天秤の分銅のようにつり合っている。

サロンの人々が見守る中でカタニ氏がどう答えるか。黒幕の大物らしくペルニションを黙らす、という見せ場を期待した連中の失望を買うが、もっともカタニ氏らしい答え方、若者に対する寛大さでこれをはぐらかす。

「私は若さが好きだ。そして私に馬鹿気たことをしたのもこの男がはじめてではない．．．狂気の沙汰だ．．．全く気遣いじみたことを．．．」

(p. 414)

ムーシェットのカディニャン侯爵殺しも、ガレ医師によって狂気の沙汰と片づけられた。「若さが好きだ」という若者コンプレックスも、一般的な徴候ではあるが、「若い同僚を何人もこうして利用し、道具にしてから、つぎつぎとすてた」(p. 405) カタニ氏はフィリップやオリヴィエを利用する才能の枯渇に悩むガンス(『悪夢』)のテーマと重なる¹¹⁾。

c. ゲルー

「ゲルー氏の蔑んだような沈黙に、あわれなペルニションは、気をはりつめた微笑で精一杯こたえた。」(p. 383)

ゲルーのサロンの最後の登場人物が当のゲルーになってしまった。ここに引用したのは第2部の冒頭の文章である。このサロンでの激しいやりとりの間、ゲルーはほとんどつねにこの冒頭の文のように距離をおき、あまり発言しない。しかしこの人物についても、短いポルトレは挿入されている。「この奇妙な人物ほど、ありふれた出来事、言葉、視線からさえも、隠れている苦渋にみちた真実、潜在的な悲劇をひき出せる者は誰もいない。(．．．)心の底に入りこむ、むさぼるような好奇心(．．．)」(p. 391, 傍点筆者)さらに別の箇所でも「驚くべき好奇心」(p. 383, 傍点筆者)とゲルーについて書

かれる。この好奇心は、セナブルの内に見たものとほぼ同義と考えられる。

ゲルーに関しては、むしろ肉体的特徴がその沈黙を補っている。身体的ポルトレはなかなか興味深いので労をいとわずひろい出して見よう。

「脂肪によって相の変った顔」(p. 383), 「頬のたるみの中に隠れてしまう美しい口」(p. 383), 「ガーネット色のピロードのチョッキにしめつけられた胸にまで押しよせる肉のだぶつき」(p. 383), 「その巨大な上半身をやっとのことで動かしている体の不自由な男」(p. 393), 「ゲルー氏の視線, 彼(ペルニション)はそこに同情のようなものを読みとれると思ったが, 本当は何なのかわからない。その視線は, 彼を平静にするどころか, いまや絶望的な執拗さをかきたてるだけだった」(p. 397), 「顔を, 大きな, およぶよしたピンク色の手で撫でて」(p. 399), 「へたな闘牛士にうんざりした観衆の身振り」(p. 403) 等々。

ゲルーの出番は, みな帰ってしまったあとペルニションがエスプレット司教にすすめられ, 再びゲルーの家に戻ってきたのを寝室に迎えた, 第2部の最後になる。

エスプレット司教のポルトレと対照するように, この部分にはやはりポルトレが登場する。対照点を中心に簡単にひろっておこう。ペルニションがゲルーの寝室に通されるまでの待ち時間の間を利用しての紹介は, 幕間のプログラムにのったプロフィールという趣である。

エコール・ノルマルでエスプレット司教と同窓だが, 教師からは睨まれ, アグレガシオンではうまくいかず, 家の者からは縁を切られた背徳者(最後の方で外人部隊にいたことがあるというマッサージ師が登場する)。36万部という大ベストセラー『文芸の庇護者と侍女たち』で一躍有名になり, その後それぞれ趣の異なる2冊の著書を書いた。3冊目の書かれたのもずっと以前で「感動をもたぬ心の傑作」(p. 426), 第2作で登場した悪徳すら生命のあまりに積極的すぎる部分として, わずかにほのめかされるだけ。そして以後, 何も書いてはいない。

「脂肪がたっぷりつき, 恐るべき肥満に苦しむこのあわれな人物の崩壊が

容赦なく進行している」(p. 427), 「脂肪の屍衣につつまれたしかばねのごとき」(p. 428) 存在となっている。

こうした肉体の崩壊によって、精神は病的に研ぎすまされる。しかも輻晦した形で。これも現代の病理学であろう。彼はペルニションのうちに自殺への傾斜を読みとる。

「つまらぬものに夢中になったことを白状するぐらいなら自殺するほうがましだ、と思っている。虚栄だ。どんな情熱でもいつかピストルを手にさせることがあるが、引き金をひくのは虚栄だ。(…)こうだ、結局おそらく君は自殺しないだろう。君は自由だ。ただ君が私の部屋に一步ふみこんだとき、君の顔にそれが読めたのだ。

この言葉のひとつひとつが、実体をともなって、恐るべき正確さで、意識の同じ点をうった、そしてペルニションの苦悩は、それによってしびれてしまったようだった。最初の恐怖につづいて、彼は自分の奥底に隠れた考えの告白が、自分以外の者の口からなされるのを聞いたのだ、そして言えぬ安堵を次第におぼえた。彼がゲルー氏を見つめていた視線は、奴隷の視線だったが、今はゲルー氏がそれを避けた。」(p. 433-4)

ここに見られる対話、洞察力は、ドニサン-ムーシェット、2人目のムーシェットと香部屋係の老女の間で見られたものと同じである。

さらに悪徳について語るゲルーにも、ベルナノスの人物の口調がある。

「——君は悪習を経験しているかね。

——私ですか。ペルニションはぎょっとして口ごもった…。ええ…。いいえ…。その…。

——悪徳の長所は、すぐに平静に戻った『文芸の庇護者』の著者は口をひらいた、人間を憎むことを教えてくれることだ。自分を憎むようになるまでは万事うまくいく。というも、聞くが、自己のうちに、自分自身を憎むのは地獄だろう。君は地獄を信じているかね。ペルニション。

彼は答を待たなかった。

——私は信じている。そんなに遠くのことじゃない。私の家が地獄なん

だ。」(p. 437)

このふたつの対話、これをひとつのパロディと読めないこともない。しかし、ペルニションを自殺へと誘う地獄の糸は、たしかに存在したのである。

のちに『よろこび』でフィオドールが、ド・クレルジュリーの家を、この家は地獄だ、と言う。ド・クレルジュリーとロシア人運転手フィオドール、ジャンタルの世界で、このゲルーの寝室からわずかに影の感じられた少女の影が読者の頭をよぎる。

3

ほとんどが登場人物の対話で構成されていることが多いベルナノスの作品のなかで、多くの人物たちが登場し、その人物のそれぞれがひとつの社会的役割とでもいうものを表わすこのゲルーのサロンには、以上に検討した主要人物以外にも、コンブ内閣の協力者、枢機卿会議のかつてのメンバー、民主主義を支持するヴォルテリアンの子爵、小詩集を司教に献じようとする夫人等々がいる。

こうしたそれぞれ役割をきめられた *type-personnage* による第2部が果して、『欺瞞』の構成、あるいは『よろこび』をも含めて構想された作品全体のなかで、異質分子かどうか、また人物の発展性のなさゆえに小説的興味をそぐかどうか、たしかに他のベルナノス作品では、その舞台がきわめて象徴的に現代世界を表わす。とくに北フランスの農村のなかに倦怠にむしばまれる現代が描かれる。これに対し、パリの著名な文筆家のサロンは、生々しい第3共和政、ローマ教皇庁などの政治、宗教界の話題が、あやしげな人物たちの間で飛び交い、ポレミックな様相が強い。

こうしたポレミスト・ベルナノスの攻撃する凡庸な人物たちのオペレッタ、あるいはファルスとでもいうべき章では、何重もの層をなした虚偽と偽善の綾が、ペルニションというサロンの犠牲者の最後のあがきによって照らし出されてゆく。もともと凡庸さそのものがベルナノスによって断罪されて

おり、深化も、展開もありようのないテーマであるから、万華鏡の色硝子のように互いに己の姿をうつしあい、狂宴をくり広げるが、外光がなければ自分たちだけでは、回転する毎に乾いた音をたてるしかない世界である。

そうした凡庸さの層が、セナブルという大きな核を失った狼狽ぶり、と同時に、不用分子を切りすてる自己保存本能の厚い殻。半身不随の怪獣は新たな餌食に事欠かないだろう。

3人の主要人物たちに表われた、それぞれの虚偽が、セナブルとペルニシヨンの別れによって明らかにされると同時に、セナブルの自己の内にある凡庸さへの嫌悪、虚無の世界の闇をも暗示する。セナブルとゲルー、この二つの地獄が第2部の最後で重ねあわされているのである。

(1985. 11. 5)

注

- 1) Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre: *BERNANOS, Essais et Ecrits de Combat*, tome 1 (La Pléiade, 1971) p. 1039.
- 2) *ibid.* p. 1040.
- 3) サン・マランとアナトール・フランスについてはプレイアッド版 *Sous le Soleil de Satan* p. 280 に対する Michel Estève の注 (*BERNANOS, Œuvres romanesques*, La Pléiade, 1961 p. 1765) など。セナブルとブルモン師については、Michel Estève の注 (*ibid.* p. 1766) の他、Joseph Jurt: *Bernanos et Bremond, Etudes bernanosiennes* 15, 1974 に詳しい。*Monsieur Ouine* のウィーヌ氏とジッドについては Michel Estève の注 (*ibid.* p. 1857) など。
他に、『欺瞞』のゲルーがルナン、ジッドらを想起させることについては、Max Milner: *Georges Bernanos, Desclée de Brouwer*, 1967, p. 128 参照。
- 4) 拙稿「『ダルジャン夫人』について」、「独仏文学」第3号、1969。ならびに、「ベルナノスの『悪夢』について」、「独仏文学」第10号、1976、参照。
- 5) *Nous autres Français: BERNANOS, Essais et Ecrits de Combat*, tome 1 *op cit.* p. 736-737.
- 6) cf. Joseph Jurt: *Les lectures de L'Imposture en 1927-28*, *Etudes bernanosiennes* 15, 1974.
- 7) 拙稿「ジョルジュ・ベルナノスにおける欺瞞者の問題1」〔大阪府立大学紀要(人文・社会科学)〕第17巻、1969、参照。

- 8) *op. cit.* p. 126.
- 9) 拙稿「ジョルジュ・ベルナノスにおける欺瞞者の問題 I」〔大阪府立大学紀要(人文・社会科学)〕第17巻, 1969.
- 10) *L'Imposture* p. 403. BERNANOS, *Œuvres romanesques*, La Pléiade, 1961.
- 11) 拙稿「ベルナノスの『悪夢』について」, 「独仏文学」第10号, 1976, 参照.